様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　27 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：１９７３０４９１
研究課題名（和文）　遊びの援助における保育者の専門性の確立：小学校教育との学びの連続性を図るために
研究課題名（英文）　A study on the professionalism of preschool teachers to enrich children's play: Towards elementary school transition program
研究代表者
北野　幸子　(KITANO SACHIKO)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：９０３０９６６７

研究成果の概要（和文）：幼児教育は遊びを見守るだけの子守ではない。本研究では幼児の遊び場面の分析、学びの内容の抽出、保育者の判断の根拠と援助の特徴を検討した。結果、①遊びには小学校の教育内容が多く埋め込まれており、その援助は②子どもの相互作用に関わりながら臨機応変な判断を要し、③気持ちの育ちや結果よりも過程を重視していることが分かった。保育者の専門性は独特であり、遊びの援助を科学的根拠に基づき説明する方法の探求と、援助に必要な知識・技術・その活用力の養成方法の開発の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：What children learn during free play activities? How preschool teachers give insight and make decisions to enrich children's learning during free play activities? This research investigates the contents of young children's learning during free play activities and the professional skills of preschool teachers to enrich children's play, comparing from elementary school education to enhance the transition. Those were made clear that preschool children's free play activities provide multiple learning opportunities including huge contents of elementary school education, preschool teachers are expected to make a lot of live decisions through interacting to children's interactions, and the teachers tend to value children's learning process and socio emotional development rather than the results of learning. This research suggests the needs to improve evidence based narrative approach to have people to understand the reflective professionalism of preschool teachers during children's free play activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	0	700,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,300,000	780,000	4,080,000

研究分野：乳幼児教育学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：保育者の専門性、就学前教育、保幼小連携

１．研究開始当初の背景

(1)保育所・幼稚園・小学校の連携

近年、小一プロブレム、小学校における校内暴力の増加等の問題が指摘されている。このような中、保育所・幼稚園・小学校の連携が試みられつつある。園と小学校の相互訪問、

教師の交流などは進められているが、学びの連続性を図る系統性の検討や、なだらかな教育方法をさぐる試みは不十分である。

保育所・幼稚園・小学校の連携については、一方で、小学校における教科教育を前倒しし、幼児教育における遊びを中心とした保育の見直しを指摘する声がある。他方で、遊びを中心とした保育の重要性は、幼児教育領域の長年の研究の蓄積により明らかにされてきたことである。加えて、小学校低学年の教育実践においても、遊びの要素をいかに多く埋め込むかが、教育効果に繋がるとの研究成果が報告されている。

(2) 保育者の専門性

報告者は、保育者の専門性および保育領域の専門性の確立問題についての研究を一貫して行ってきた（アメリカの保育職能団体が保育の専門職化に果した機能に関する史的研究：研究課題番号 12710156、保育者の現職教育・研修に関する日米比較研究：研究課題番号：14710202、ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成システムの現状調査と４年制モデル養成システムの検討：H18-政策-若手-004 等）。そこでは、保育者の専門要件（知識や技術）や保育領域の専門性の確立状況について分析してきた。

その結果、遊びの援助にこそ保育者の専門性の独自性がみられるであろうと考えた。また、保育者には、後の教育の見通しを持ちつつ、幅広い教養と継続した学習が不可避であることを確信するにいたった。

脳科学研究や社会経済学研究の成果からも、保育における教育的要素の見直しと推進が国際的にも進められている。以上の背景から、保育者の専門性、特に遊びの援助に関しての専門性とは何かを明らかにし、その向上図る必要があるとの考えに及んだ。

２．研究の目的

以上の背景より、本研究の目的は、小学校教育との連続性を踏まえながら、幼児教育での遊びの援助における保育者の専門性を検討することである。

本研究では、幼児教育における遊びの場面を分析することによって、遊びの中に埋め込まれている学びの内容を明らかにする。特に、その内容と、小学校教育内容との関係性を明らかにする。また、保育実践における保育者の判断のあり方（教育実践の根拠）を検討し、援助の構造化を図ることを目的とする。さらには、遊びの援助における保育者の専門性を検討し、その特徴を明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

(1) 遊び場面での幼児の学びと保育者の援助に関する分析

保育実践において、子どもたちは遊びを通じて何を学んでいるのであろうか。また、保育者はどのように子どもたちの遊びの援助を行っているのであろうか。

以上を検討するために、保育実践における遊びの実態と保育者の援助のあり方を明らかにし、さらに、それと小学校の教育内容との比較検討を行った。

幼児教育における遊び場面の実態把握の方法としては、A幼稚園における好きな遊び場面のデータを収集し分析した。好きな遊び場面を対象とし、自然観察法によるビデオ撮影によりデータを収集した。収集したデータは、平成 19 年度：39 日分、平成 20 年度：24 日分である。遊びの区分ができるものを１エピソードとし、合計 124 のエピソードについて、撮影記録から幼児と保育者の会話のテープおこしを行った。会話の中で、教え合ったり学びあったりする様子がうかがえるもの、保育者の援助により、知ったこと、できるようになったことを抽出した。

小学校教育との関係性を明らかにするために、小学校学習指導要領の教育内容と、保育現場における遊び場面のエピソード記録と幼児の会話のテープおこしの結果を比較検討した。

好きな遊び場面では、子どもの主体的な活動を尊重するために、一斉保育に比べて子どもの嗜好性や個性差による経験や学びの偏りがみられることが予測された。よって、抽出児Ｂに焦点をあて、どうように、小学校学習指導要領に記載されている教育内容との比較検討を行った。

(2)保育所・幼稚園・小学校のクラス通信の内容に関する比較調査

保育所・幼稚園・小学校での教育内容について比較検討するために、Ｃ市のすべての保育所・幼稚園・小学校に平成 20 年 2 学期に年長クラスと１年生クラスで配布された、通信の提供を依頼した。

Ｃ市の全保育所（11 園）、９園中 7 園の幼稚園、全小学校（15 校）より通信の提供をうけた。分析した通信の枚数は、保育所：211 枚、幼稚園：316 枚、小学校：265 枚である。分析項目は、体裁等（発行枚数、写真の有無）、家庭との連携に関わる内容（親業教育の要素を含むもの（教育コラム等）、保護者への依頼、園学校での子どもの姿の伝達）、行事・社会見学の内容である。

(3)保育者の援助の根拠に関する調査研究

保育実践における内容の選択にあたり、保育者が、何を根拠としているのかを明らかにするために、質問紙調査を行った。調査対象は保育所と幼稚園の保育者 340 名である。実

施期間は平成20年8月から21年5月である。
調査項目は、絵本については、読み聞かせの頻度、絵本選択の基準、時間設定、教育意図、教材活用方法を、音楽については、歌う曲数、曲や楽器選択の基準、教育的意図を、生活発表会等行事については、日常保育との違い、演題の選択基準、教育意図についてである。また一般的に教育実践を計画する上で参考にしていることについて、質問した。

(4)保育所・幼稚園・小学校の連携につながる遊びの援助に必要な保育者の力量とその向上に関する実践的研究

現場の保育者5名を対象としたヒアリング調査、教育委員会主催の園長・校長との連携会議（５回)、研究会での連携に関する自主シンポジウム（1回)、各園での園内研修（6回）を行い、連携の課題の抽出、具体的行動計画の策定、保育ドキュメンテーションの検討、遊びの映像・写真を元に学びの内容・援助の視点について検討した。保育要録の記録や、遊び場面の分析方法の検討も行った。

(5) 遊びの援助方法や保育所・幼稚園・小学校の連携に関わる養成教育の実態調査

平成21年12月、3月　計2回に分けて養成校教員10人を対象に、遊び場面の援助や保育所・幼稚園・小学校の連携を図るために必要な保育者の力量とは何か、それにかわる養成教育を行っているのか、行っているとしたらその実際（工夫）は何か、について、ヒアリング調査を行った。また資料（シラバス、授業教材）の収集を行い、その実態と特徴を検討した。

４．研究成果

(1) 遊び場面での幼児の学びと保育者の援助に関する分析

63日分の遊びのデータから、抽出した遊びのエピソード124を、小学校学習指導要領の教育内容と照らし合わせ、科目に分類したところ、一番多かったのは、体育で47、以下、図画工作26、生活科22、音楽12、家庭科9、国語4、算数と理科がそれぞれ2となった（図１参照)。

具体例としては、体育については、運動会や発表会と関連した表現リズム遊び、一輪車や縄跳び、ぽっくりなど操作する運動遊び、サッカーやドッチボールなどルールを使うボールゲームがなされており、特に表現リズム遊びと操作する運動遊びにおいては、子ども同士の教えあいや保育者による問いかけによる援助が見られた。またゲームでは規則を守り、仲良く行い、勝敗を素直に認め合うなど、小学校2，3学年の内容も多く含まれていた。教育の方法については、いずれも子ども10名までの人数であり集団の規模が小さかった。遊びの始まりは自発的であり、技術の見せあい、教えあい、ルールの確認は子ども同士の会話が先にあった。これに、保育者が後から参加し、問いかけを行い、自覚化を図るといった援助の特徴があった。

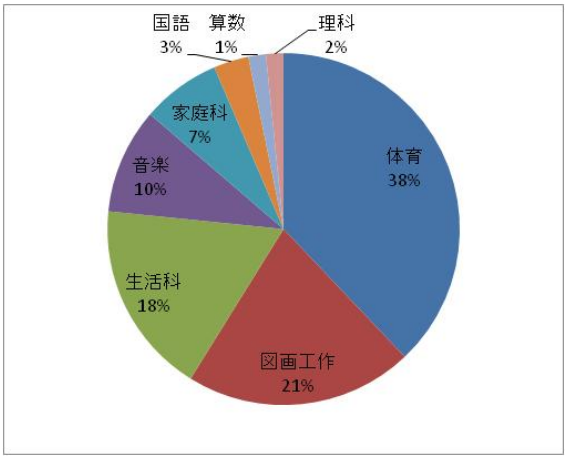

図１：遊びの中の学びの内容

図画工作については、素材に親しむこと、思いついたことを楽しく表現すること、体全体を働かせて造形遊びをすることなどが実施されていた。鑑賞については、多人数で一斉に何かを同時に鑑賞するという形ではないが、少人数でお互いがつくったものについて気持ちを聴き伝えあう相互作用が見られた。方法についての違いがあるが、内容についての類似性が高いことが分かった。製作につながる環境は、あらかじめ保育者が素材を用意していたり、保育者に子どもが要求していたりしていた。保育者からは指示や命令よりも、子どもを褒めたり認めたりする言動が多くみられた。

生活科については、虫取り、植物等自然や天気の観察、四季の変化、動植物の育て、伝承遊びなどにおいて、子ども同士の会話から空間場所の認識、発生しやすい時期、飼育方法、遊び方等の知識の交換があり、また保育者への問いと答え、協同での図鑑調べ等の共に学ぶ姿もみられた。

家庭科との関係では、疑似的ではあるが、ままごとや買い物ごっこ遊びがなされていた。ごっこ遊びの会話から、調理方法（切り方、ゆで方)、バランス、食べ方、行事食、季節の食べ物、買い方などが話題となっており、教えあいが見られた。食育については多くの園が取り上げているところでもありその影響も伺えた。

好きな遊び場面では、一斉保育に比べて子どもの嗜好性や個性差による偏りがみられることが予測されたが、抽出児に焦点をあてて検討した結果、８科目中６教科の内容が見られた。偏りはさほどなかったと評価できると考える。教科につながる内容が遊びの中に

バラエティー豊かに含まれていた。

(2) 保育所・幼稚園・小学校のクラス通信の内容に関する比較調査

保育所では、通信の中に各クラスの様子を記載している園が 6/11 園あった。枚数は 8～57 枚と差があり、園平均 19 枚であった。6 園で毎回写真が掲載されており、枚数は 16～322 枚であった。写真を多く掲載している園が発行部数も多かった。幼稚園では、枚数に 13～153 枚と差があった。園平均 45 枚で、突出した一園（153）を除くと平均 27 枚であった。写真は 5 園で掲載されており 7～106 枚であった。小学校では、全校で学級通信が配付されており、10-23 枚で、各校による発行部数差が小さい。写真掲載は 5/15 校でなされており（2,5,15,21,55 枚）、園と比較して少なかった。

保育所と幼稚園では全てにおいて食育・衛生教育・基本的生活習慣の形成についての記述があった。教育コラム等が記載されており内容は多い順に、食育、子育ての方法、健康、子どもの発達であった。親子との関わり方を促す方法として、紹介されていたものとしては、歌遊び、絵本の読みきかせ、行事参加、その他遊びの紹介の順に多かった。その他、保護者対象の講演会、小学校までにしておきたいことというコラムなど保幼小連携にかかわる親業教育の内容があった。

小学校では、内容としては健康・衛生に関する情報提供が多く、平均 4.7 項目であった。保育者や幼稚園においては、保護者への啓発的な記事が多く発信されていたが、小学校では、全体として親業教育の要素は少なかった。小学校では、子どもの達成課題が直接的に明示されているが、幼稚園や保育所では、望ましい姿をはぐくむことが保護者に期待されており、間接的に達成課題が示されている点が特徴として明らかになった。

家庭への依頼内容のうち園では行事とかかわる依頼が一番に多く、続いて持ち物、園の手続きの順に続く。総数としては少なく、例えば幼稚園での依頼は 2-14 で平均 7 であった。一方小学校では行事以上に学習にかかわる準備等の依頼が多く、総数も園平均と比較して学校平均 3 倍近くあった。学習準備に関わる依頼が学校平均 15、行事準備依頼が平均 14 あった。家庭での学習についての依頼は平均で 8.1 項目あった。

園では、通信の中で、子どもの発言や様子を多数とりあげており、例えば保育所では子どもの発言そのものを紹介しているエピソード数が園平均 32、同幼稚園 35 であった。これに対して、小学校では 8.6 であった。園では子どもの様子については日常の遊び、行事、生活場面での育ちについての順に記載が多く、一方小学校では学習の様子が学校平均 12.1 記載されていた。

園と小学校の教育内容について比較した結果、例えば小学校の社会見学で訪問した場所のうち 57%以上が、すでに就学前に 1 回以上訪問したことのある場所であることが分かった。社会見学等訪問場所について、幼稚園や保育所では、年少の子どものお世話をしながら訪問した同じ場所に、上級生に付き添ってもらって訪問しているといった事例もあった。

栽培している植物の内容も重なっていた。あるいは、多様性に関しては園の方が小学校よりも高いことが明らかになった。食育関係の行事も園と小学校で重なりが多分にあり、小学校よりもむしろ園の方が多数実施していることもわかった。

園だより学級通信を比較分析した結果、保護者に対する関わり方の違い、情報の提供方法や質の差が大きい一方で、実践内容については重複部分が大きく、保幼小連携の課題が明らかになった。

(3) 保育者の援助の根拠に関する調査研究

調査の結果、絵本に関しては、88%の保育者が一日 1 冊以上の本を読み聞かせているが、その選択の根拠を複数選択で問ったところ、季節（209／340 人）が最も多く、次ぎに年齢（169）が多かった。読み聞かせによって育みたい力は、想像力（188）が最も多く、次ぎに多い集中力（65）と大差があった。

歌選びの根拠については、89%が毎日 2 曲以上の歌唱頻度であるが、その選択の根拠は、季節(181)、年齢(137)が圧倒的に多かった。歌唱を通じて育みたい力は、音楽の楽しさ（126）、共同の楽しさ(103)、表現力(56)と続く。

行事での演題選択の根拠については、年齢(89)、子どもの好み(86)が多く、その意図は協力する大切さを学ぶ（95）、表現力をつける(79)の順に多かった。

調査の結果、保育者は、季節、年齢を実践の内容の選択の主な根拠としているが、好きな遊び場面での子どもの活動や探求心との関係性が見られなかった。教育意図は「想像力の育成、協調性の伸張、楽しむ」といった抽象的なものが多く、具体的な活動内容や教材との関連が分かりにくいものであった。

以上から、特に小学校教育との連続性を図る場合、好きな遊びの時間と設定保育や行事との繋がりをつけることが必要であること、実際の教育内容とつながる教育意図を提示することなどの課題が示唆された。遊びの援助や各判断の根拠を説明する力量、つまり、子どもの現状や教育課題を把握し、それを科学的根拠として、保育における援助の特徴を説明する力量が保育者に必要であることが示唆された。

(4) 保育所・幼稚園・小学校の連携につながる遊びの援助に必要な保育者の力量とその向上に関する実践的研究

ヒアリング調査の結果、保育者は、好きな遊び場面において子どもの援助を行う場合、「人間関係」についての課題を最も強く意識していることが伺えた。遊びを通じて学んで欲しい内容については、このような知識を身につけて欲しいという見通しを予め持たない傾向が明らかになった。子どもの体験の中での疑問や興味から出発し、疑問に思う心、調べる過程、知る喜びといった学びの過程とその過程での感情について評価していることが分かった。

遊び場面の写真やビデオを活用した園内研修より、「好きな遊び場面における子どもの学び」として抽出された項目のうち、一方で気持ちの育ち（人間関係）にかかわるものが 76%あるが、他方で知識・技術にかかわるものは 24%でであった。また、写真やビデオを視聴後の自由記述では、保育者は、身につけて欲しい知識と技術についての具体的記述は少ないが、人間関係については「こうなって欲しい姿」についての見通しを持っていることが分かった。援助方法については、「みまもる」「認める」「言葉をおぎなう」「共感する」「共有する」の順に記述が多く、評価については、感情の育ちや変化についての記載が主であった。

小学校教育との連携については、連携についての連絡会議、研修、シンポジウムを通じて、保育者からは、小学校学習指導要領の内容のうち、生活科や体育などとの類似点を自覚していなかったことや、小学校入学当初の教育内容は、実際の子どもの力よりも低く見なして構想されているのではないか、といったことが指摘された。小学校教諭からは、要録が実際は活用されていないこと、その理由は記述内容が抽象的で具体的内容や教材、指導法に関する記述が乏しいことなどが指摘された。

(5) 遊びの援助方法や保育所・幼稚園・小学校の連携に関わる養成教育の実態調査

好きな遊びの場面を想定した、援助の方法に関する養成教育の実態としては、課程論、方法論、各領域内容・指導法の授業で部分的に取り上げられていたが、１コマをそれに当てるなど特に好きな遊び場面を想定した養成教育を実施している養成校はなかった。指導案の作成等は、環境構成の方法と設定保育に関するものが主であった。

一方で、プレーパークや、子育て支援センター、保育施設等を訪問したり、ビデオ視聴により子どもの遊び場面の観察や観察後のディスカッションを導入したりするなど、工夫している養成校もあった。

遊びの援助の方法や、保幼小連携に関わる養成教育の実態についてシラバスを分析し、専門家会議で検討した結果、連携を扱う授業が少ない実態がある一方で、幼児教育内容に関わる授業を小学校教員養成課程の必修科目としている例や、実習の事前事後の交流研究会を学年を超えて実施している例、実習データを蓄積している例、演習の記録様式等の工夫がなされている例、等が明らかになった。

(6)総括

本研究全体を通じて、幼児教育における遊び場面の特徴としては、子どもたちが主体的遊びを選択している中に、無自覚ではあるが、小学校教育の教育内容と関わる幅広い経験があるということが明らかになった。

遊びの援助に関する幼児教育の方法の独自性としては、子ども同士の相互作用に保育者がかかわり、その関係性の中から援助の内容を構想していることが明らかになった。保育者には遊びをつなぐ技術が必要であり、結果よりも過程を大切にする傾向が明らかになった。しかし、一方で内容が曖昧で、気持ちの育ちに焦点が向けられがちであり、その点が小学校教員をはじめ、保育者以外に保育の内容や独自な方法を説明することを困難としていることが伺えた。

本研究を通じて、保育者には、多様で階層的な力量が必要であることが示唆された（図２参照）。

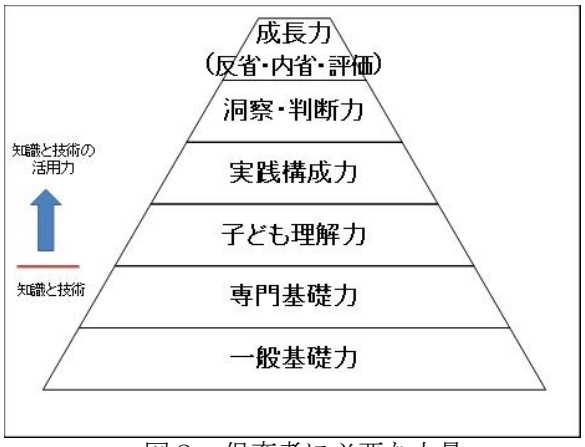

図２：保育者に必要な力量

つまり、子どもの実態、発達、教育に関する一般基礎力と教育保育課程にかかわる専門基礎力といった、知識と技術に加えて、それらの知識と技術を活用する力、例えば、子どもを理解する力（子ども理解力）、実践をつくる力（実践構成力）、ライブで実践中に子どもをめぐる実態を把握し、実践に関する各種判断をする力（洞察・判断力）、さらには、省察を繰り返し遊びの援助を行う力向上し続けていく成長力が必要であるとの考え

に至った。
　このうち、特に、洞察・判断力が遊びの援助における保育者の専門性として挙げられることが本研究を通じて明らかになった。さらに、本研究から、遊びの援助における保育者の専門性を確立するためには、養成教育に課題があることが示唆された。好きな遊び場面を想定した養成教育では、観察や環境構成が中心であり、方法と技術に関しては、環境構成の工夫、設定保育の指導案作成、模擬保育の実施が中心であった。指導案作成や模擬保育すら実施していない教科教育科目があることもあきらかになった。養成教育において遊びの中での子どもの学びをみとり、それに基づき実践を構成する技術の基礎を培う必要があることが示唆された。
　今後の課題としては、遊びの援助において子どもにどのような力が育ったかについて、より小学校教育の内容と方法の比較しながら言語化すること、保育者の各種判断についての科学的根拠に基づいて説明する方法を探求すること、遊びの援助に必要な知識と技術その活用力の養成方法を開発することがあげられる。これらを通じて保育者のリフレクティブな専門性についてのさらなる検討も今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① Kitano, Sachiko, Current Issues in Assessment in Early Childhood Care and Education in Japan, *Early Child Development and Care* Vol. 181, No. 1-2, pp. 181-187、2011、査読有
②北野幸子、幼保一体化と保育　幼保一体化を教育的視点から考える－教育専門職としての保育者、保育の友、2010.8 、18-20 頁、依頼論文
③金子幸、北野幸子、幼児の自己肯定感を育む教育方法に関する研究－メディアとしての絵本とその活用の検討－国際幼児教育研究、18、5-13 頁、2010、査読有
④北野幸子、アメリカの保育専門組織による保育改革―全米乳幼児教育協会(NAECY)の動向を中心に―　国際幼児教育研究、17、55-60 頁、2009、査読有
⑤Kitano, Sachiko, Current Policy Issues in Early Childhood Care and Education in Asia: The Promotion of Professionalism, *International Conference of Early Childhood Education* 2009、依頼講演論文
⑥北野幸子、ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成の現状と課題、社会福祉学、50-1、123-133 頁、2009、査読有
⑦北野幸子、中野道子、教育委員会と大学の協働による保幼小連携推進の試み、教育実践研究、17、73-79 頁、2009、査読無

〔学会発表〕（計６件）

①北野幸子、遊び場面における子どもの学びと 保育者の援助に関する一考察、日本乳幼児教育学会第 20 回大会、2010、審査なし
②KITANO, Sachiko,　他４名、What is needed to learn before going to the student teaching? : Rethinking Japanese Pre-service Training in ECCE、環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）第 11 回大会、2010、審査有
③北野幸子、保幼小連携の課題に関する調査研究-園だより・学級通信の分析-、日本保育学会第 63 回大会、2010、審査なし
④KITANO, Sachiko, How Early Childhood Care and Education Teachers Make Decisions to Design Practices?; Improving Evidence Based Practice in Early Childhood Care and Education, 環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）第 10 回大会、2009、審査有
⑤ KITANO, Sachiko, What are children learning through free play activities? ; Gathering data to design preschool to elementary school transition program, 環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）第９回大会、2008、審査有
⑥ KITANO, Sachiko, The State of the Hoikushi preparation in Japan: the analysis of the courses and the interviews to teacher educators, 環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）第８回大会、2007、審査有

〔図書〕（計４件）

①北野幸子編著、保育課程論、北大路書房、32-35、53、72、147-160 頁、2011
②北野幸子編著、子どもの教育原理、建帛社、1-9、152-162 頁、2011
③北野幸子編著、乳幼児の教育保育課程論、建帛社、1-14、175-179、183-187 頁、2010
④北野幸子、角尾和子、荒木紫乃編著、遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術―実践力の向上をめざして―、北大路書房、2-8、185-194 頁、2009

６．研究組織
(1)研究代表者

北野　幸子（KITANO SACHIKO）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：90309667